北上山地の森と人々

アレン国際短期大学　　岡　恵介

研究対象地:岩泉町安家地区(旧安家村　図1)

1979－1981　安家における筑波大学環境科学研究科による調査「生態系把握と住民参画に基く山岳諸地域の活性化に関する比較研究」(文部省科学研究費)

1981年には，安家会議という山村の首長を安家に呼んで村づくりについて考える、今で言うサミットの開催など。

研究テーマ:過去150年間の北上山地山村の人々と自然とのつきあいの歴史を明らかにする。

キーワード:生存戦略、環境利用、生業の変遷、社会特性、持続可能性、

本日のキーワード:(名本(1996)が分析のために使用した造語)

「居住地域外志向型生存戦略」・・・地域内の資源を利用するよりも、出稼ぎなど地域外に出て生存を図ろうとする戦略(例:津軽地方の農村)

「居住地域内完結型生存戦略」・・・危機的な状況下にあっても地域内の自然(シタミなど)を利用しながら最低限の自給を図ることによって生き抜こうとする戦略(例:北上山地山村)

1．調査地の植生の特性(表1)

北上山地の植生の大きな特徴のひとつは、奥羽山脈側ではブナ林が分布する標高で、純林状のナラ林が分布することである。奥羽山脈側では標高200メートル地域でもブナの純林があった形跡があるが、北上山地ではブナは標高700メートルぐらいまでで、その下にはミズナラの純林が分布する(これを北上山地中北部ではミズナラ林が極相林として成立しているとする見解もあり、ミズナラはブナに比べて開葉期が遅いため、遅霜の激しい北上山地ではミズナラ林が低山帯に優占すると説明されている)。

クリの分布も広く、ミズナラ二次林の下部がミズナラ・クリ林の型を示すことが多い。

安家地域の集落は標高300メートルから500メートルの間に分布し、潜在植生としてはナラ林のなかで生活していたことになる。

2．食料の自給(常畑と焼畑)

常畑・・・2年3毛作(表3)

焼畑・・・アワ、ヒエ、ダイズ、アズキ、ソバなど常畑と同じ品種を栽培(表2)。焼畑をアラキと呼ぶ。安家地区では、天保の飢饉の時にもここでは作物に実が入ったという伝承がある、山中の焼畑用地が現存する。

昭和10年代の安家における一軒当たりの平均所有耕地面積・・・常畑1町、焼畑6.5反
計約1町7反

一家族八人の年間に食べる主食(ヒエ、大麦)の量・・・ヒエ21石9斗、オオムギ7石3斗

明治44年から昭和12年の平均反当収量・・・ヒエ反当り1.38石、オオムギ1.62石

ヒエを反当り1.38石で21石9斗を得るためには約1町6反の畑が必要で、2年3毛作ではヒエを栽培できるのは全体の半分だから、その2倍の面積の畑が必要。(刈り分け小

作ではさらにその２倍）。よって平均的な耕地面積の農家では畑作で自給できる食糧は必要量の半分程度だった。

これは昭和１３年の安家の食料自給率は50パーセント（積雪地方農村経済調査所、1938による）との報告とも合致。

焼畑（アラキ）は最近では戦後の欠配時（昭和２０年から２５年）に復活し、食料の不足分をおぎなった。

３．堅果類の利用

聞き取りによれば、冬期 から春にかけての基本食としての堅果類、シタミ(ミズナラ、コナラ、カシワの実)の利用が畑作による自給の不足分をおぎなった。

一軒当たり３石から５石のシタミを貯蔵・・・栄養量で計算すると一家族８人が約３ヶ月暮らせるカロリーにあたる。ただしシタミはそのままでは渋くて食べられず、アク抜きを必要とする。一般に用いられた加熱処理によるアク抜きで約８時間、水さらしではアク抜きに３日を要する。

三閉伊一揆の指導者の一人、安家村俊作の日記でも天保の飢饉の時代（七年ケガツと呼ばれた）に、「シタミ少々成る　是にて大分助かり候」、また「栗シタミ沢山に成り万民大いにひろい取り悦びかぎなし」、「木の実も不足」といった記述が見られ、食料としてのシタミの重要性を示している。

こうしたシタミの利用は近年では、戦後の欠配と呼ばれた昭和２０年から２５年頃にも復活して食料の不足を補っている。

４．安家地区の社会特性

かつて安家天皇と呼ばれた大地主と村外の山林大地主があり、小作制度が発達し、地頭名子制度がある、階層性の発達した村として知られていた。しかしこうした階層性が拡大して全村的に広がるのは、明治の終わりから昭和の初めにかけてである。

＊ まとめ１

基本的に常畑における畑作だけでは自給できなかった山村が、飢饉や欠配という事態で外部社会から食料を受け入れる道が断たれたとき、彼らの取った対応策は堅果類の利用であり、焼畑の耕作だった。それは藩政時代にも取られた対処法であり、また突然復活した技術でもなく、一部の貧しい家、耕地面積の少ない家、家族の多い家では、断続的に行われ、伝承されてきた方法だった。

かつての山村では、当時の牛の繁殖生産や養蚕、流送など限られた現金収入も、その時代の経済的変動によって大きく変額し、畑や山を手放して名子にならざるを得なくなることもあった。また子どもに恵まれず、労働力が不足する家があり、またその一方で１０人の子を育てなければならない家もあり、通年家族が暮らしていく食料を確保することは容易なことではなかった。極端に商品生産に偏っても外部経済の変動で収入は安定しないし、もちろん自給自足で暮らしていけるほど豊かな耕地があるわけでもない。

そうしたこの時代の北上山地の山村のおかれた不安定な状況にあって、食べていく

という最低限の生存を保つためには、商品生産をしながらいつでも自給部分を拡大できるようにしておくことが必要だった。この自給部分を拡大する技術として、堅果類の利用と焼畑の耕作があり、これらの技術は村の中のどこかでいつも生きてきた技術であるといえる。そしてそれは古文書や伝承によれば江戸後期とほとんど変わりはなく、山村の人々がその不安定性のなかで生きていく方途として、遅くとも天保7(1836)年から昭和25(1950)年ごろまでの少なくとも100年以上にわたって有効性を持ちえた、持続可能性の高い環境利用の技術であったといえる。

5．卓越したミズナラ林の利用

① 堅果類の食用

採集の条件・・・ナラの大木が茂る林床では、下草がなくシタミが敷き詰めたように落ちていた。

② たたら製鉄における木炭生産

たたら製鉄・・・砂鉄の供給よりも木炭の供給のほうが大事で、木炭の原木が周囲に少なくなると鉄山を移動させた(森、1969)。安家に鉄山産業が興ったことにより、鉄山に働く人たちの食糧や日用品の供給、牛の背による物資や鉄製品の運搬など、多くの仕事が生まれ、農民の暮らしは一変した。以後の重要な生業の柱のひとつとなる牛の生産や地頭名子制度の発生はすべてこの鉄山の勃興が起点となっている。

③ 昭和１０年以降の木炭生産

楢炭・・・ミズナラ・コナラを原木とする製炭が昭和１０年以降盛んになり、昭和３０年代の終わりまで安家のもっとも重要な産業であり、福島、秋田など他県からの製炭者が流入し、その人口は最盛期には２．５倍に膨らんだ(図３)。

④ 『居住地域内完結型生存戦略』の成立条件

図２に示したように、ミズナラ林を原植生に持つ地域は、東北地方のなかでも北上山地に集中している。この他には青森県の東部、いわゆる南部地方に原植生としてブナーミズナラ林がまとまって分布しているが、これ以外にはミズナラが入った樹林を原植生としてまとまった面積持つ地域はほかにはない。

北上山地山村の『居住地域内完結型生存戦略』の成立条件のひとつとして、このミズナラ林の大いなる資源量が重要であったのである。

6．出稼ぎと製炭

① 出稼ぎ・・・柳田(1931)「日本農民史」『北国人の出稼ぎのごときは、久しい以前の固定した一慣行であった』、『これ(出稼ぎ)を常態としてその基盤の上に、仕組まれたる地方農村の経済であった』原因→『生産規模のいたって小さいことで、また天然の制限ことに耕地面積の不足のため、一年中引き続いての労働の場として、充分ではなかった』

津軽地方に限らず東北地方においては、現金収入の不足を補うために農民が出稼ぎに出るのは普通のことであり、いわば『居住地域外志向型生存戦略』は東北では普遍的な生き方であった。そしてこれは安家でも同様で、明治・大正期には主に北海道への出稼ぎは少なくなく、さらには出稼ぎ先の北海道に分家したり転籍

したりする例も少なくなかった。しかし昭和に入るとこうした例は減少する(昭和の転籍は事実上は昭和以前に移住していたものが多い)。→表６

たたら製鉄は幕末に衰微し、明治・大正期には現金収入源となる生業は、秋の牛市で仔牛を売って収入を得る牛飼養と、春夏の養蚕、そして大正期に始まった枕木の流送による賃金収入が主なものだった。

②製炭・・・しかし昭和１０年に農村恐慌対策によって開削された久慈への自動車道路が開通したことにより、安家での製炭が盛んになり、年を追って隆盛を極める。→表７

道路開通によってナラ林資源は木炭という商品を生み出す源泉へと変貌し、製炭の隆盛はそれまでなかった通年稼動型の現金収入源を村人に提供することになった。ここにはじめて村人は出稼ぎに出なくても通年収入を得る手段を得たのである。

７．農村恐慌

①昭和の農村恐慌・・・昭和６年から１０年頃にかけて、繭の価格暴落と同時に東北一帯で凶作が続き、農民の飢餓や娘の身売りが農村恐慌として新聞などで大々的に報じられた。こうした娘の身売りなど農村の悲惨な状況が、当時の右翼思想家や軍部青年将校らがテロやクーデターに走った動機のひとつであり、軍部勢力の拡大につながる要因のひとつだった。こうした娘の身売りも、東北農村の取った生存戦略のひとつであり、また「居住地域外指向型生存戦略」の一変形と考えることも可能である。

②恐慌下の山村・・・北上山地の山村では、昭和のはじめに大きな恐慌があったという認識はあまりない(畠山、１９８９)。戦後の欠配は、「せっかく収穫したものを、たとえ不作でも決められた量だけ供出しなければならなかったから苦しかった」が、昭和の初め頃は「供出もなかったし、米はまだ作っていなかったから」。

・昭和初め当時、村の富裕層でも白米を食べるのは盆と正月だけであった。

・シタミの利用は恐慌時に限らず、食料が不足すればいつでも利用していた。

・娘を売ることはまったくなかった。

③娘は奉公へ・・・村内の富裕層へ、子どもの多い家や貧しい家などは子どもを奉公へ出したが、奉公へ出ることは口減らしだけではなく、しつけ・修養になるとプラスの意味で捉えられており、良い縁談にもつながり、小作や名子ではなく自作農へ嫁ぐことが出来、その嫁入り支度も奉公先の富裕な大地主が行った。さらに奉公先とは生涯親戚づきあいが続き、富裕層からの選挙へ出馬する際の集票にも役立ったという。

さらに安家の富裕な農家では大正の頃に、盛岡の水田地帯の困窮する農家から二人の少女を奉公人として預かり、二人は安家で成人しともに自作農に嫁いで安家で一生を終えている。葬式にも盛岡の生家からの参列はなかったという。

＊ まとめ２

平地農村が困窮し、娘が売られるといった状況がある一方で、農村の娘を引き取っ

て育てていた山村の富裕層がいたことを考えるとき、当時の北上山地の山村には、平地稲作農村とは異なる状況が存在していたと思わずにはいられない。こうした違いはひとつには、まだ山村の経済が市場経済化されておらず、自給的であったことにあると思われ、その自給性を支えた畑作・焼畑とともにナラ林の存在はやはり大きかったといわざるをえない。富裕層や地頭は小作・名子の労働によって豊かだったのであり、その小作・名子の生存を支えた大きな柱のひとつとしてシタミがあったのだから。

結論

北上山地山村の「居住地域内完結型生存戦略」の成立基盤には、所与の植生としてゆたかであったナラ林の存在があった。またこれを支えた条件として、製炭の隆盛や地頭名子制度の発達による出稼ぎの減少、そして富裕層への奉公の慣行により、村外への人口の流出がくいとめられていたことがあげられる。こうした構図は、第二次世界大戦後の農地解放により地頭名子制度や小作制度が解体し、奉公の慣行も消滅し、製炭も衰微し、森林のほとんどが伐採されたことにより、現在では成立しえなくなっている。

しかし北上山地の山村における暮らしの伝統は、ナラ林が生み出していたことは確かであり、その意味では北上山地においてナラ林は、さほど周囲の山村が利用していなかった白神山地のブナ林以上の深い意味を持つ自然環境であったといえる。